



JAくまがや

営農相談員（TAC）

（東部営農経済センター）

☎048-523-4311

田中 秀樹

森田 友輝

（西部営農経済センター）

☎048-533-3911

山岸 雅臣

（南部営農経済センター）

☎048-536-7911

長原 寛八

新島 匠

（北部営農経済センター）

☎048-589-2911

永倉 恒輝

吉田 正徳

TACは農業者とJAのパイプ役となる総合窓口です。TACが訪問しましたら、ご意見・ご要望はもちろん、JA事業への提言など、何でもお聞かせ下さい。誠心誠意対応をさせていただきます。

お問い合わせについては、
お近くの
営農経済センターへ

令和3年産稲作を振り返って

— 来作に向けた準備を — （本年産稲作で発生が目立った病害）

1 ピシウム属菌による苗立枯病

本病の発生は比較的まれですが低温の年に多いとされています。令和3年は育苗期間中に低温に見舞われたことから、管内でも多く発生が見られました。

本病は遊走子(ゆうそうし)と言われる状態で菌が水中を泳いで伝播し、根や苗の地際部を侵します。発生が見られた場合はタチガレエース液剤等で防除しましょう。



ピシウム属菌による苗立枯病
（白丸で囲った部分）

2 いもち病（苗いもち、葉いもち、穂いもち）

令和3年稲作で最も発生が多く、収量への影響が大きかったと考えられる病害です。近年は箱施薬剤の普及や空中散布で発生を防止していましたが、令和3年は注意報が発令されるなど「いもち病菌」の生育に好適な気象の日が多かったことから、被害を受けた圃場が多くなりました。

「葉いもち」の発生が多く、重症化して株が枯れあがるズリコミ症状が見られた圃場では、「穂いもち」も多発しました。このような圃場では、農薬の空中散布と天候の回復により、いったん病気の進展が抑えられていましたが、菌の生息密度が高かったために生き残った菌があり、秋口の降雨と低温で再発してしまったものと思われます。「葉いもち」の防除が「穂いもち」の発病防止につながりますので、次作に向けては、殺虫剤のみの箱施薬剤から殺菌剤を含む薬剤への切り替えなどを検討しておきましょう。



「葉いもち」が重症化して
「ズリコミ症状」となった稲株
（白丸で囲った部分）



「穂いもち」による穂枯れ
（白丸で囲った部分）

3 稲こうじ病

田植えが遅かった飼料用米等の一部圃場で見られました。本病は穂ばらみ期～出穂期に雨が多いと発生しやすいとされています。

本病は穂に形成された病粒（胞子と菌糸の塊）が圃場に落下して翌年の感染源となるとされています。

発生した圃場では次作で発生が多くなるとされているので、適正に防除しましょう。



「稲こうじ病」の発病穂
（白丸で囲った部分が病粒）

防除薬剤の例

適用病害	薬剤名	希釈倍数	使用量	使用時期	使用方法	本剤の使用回数	備考
ピシウム属菌による苗立枯病	タチガレエースM液剤	500～1000倍	育苗箱あたり500mℓ	は種時または発芽後	土壌灌注	1回	
	タチガレエースM粉剤	—	育苗箱あたり6～8g	は種前	育苗箱土壌に均一に混和	1回	
いもち病	ルーチンアドスピノTM箱粒剤	—	育苗箱あたり50g	は種時（覆土前）～移植当日	育苗箱の上から均一に散布する	1回	
	ツインターボフェルテラ箱粒剤	—	育苗箱あたり50g	は種時（覆土前）～移植当日	育苗箱の上から均一に散布する	1回	
	ブラシンプロアブル	1000倍	10aあたり60～150ℓ	収穫7日前まで	散布	2回以内	
	オリゼメート粒剤	—	10aあたり3～4kg	葉いもちには初発の10日前～初発時、穂いもちには出穂3～4週間前（但し、収穫14日前まで）	散布	2回以内	
	アミスターエイト	1000～1500倍	10aあたり100～200ℓ	収穫14日前まで	散布	3回以内	無人ヘリによる空中散布の剤と同一成分です
稲こうじ病	トリプルキック箱粒剤	—	育苗箱あたり50g	移植3日前～当日	育苗箱の上から均一に散布する	1回	いもち病も同時防除できます
	ドイツボルドーA	2000倍	10aあたり60～150ℓ	出穂10日前まで	散布	—	稲こうじ病に対する防除適期は出穂期の21～10日前です
	モンガリット粒剤	—	10aあたり3～4kg	収穫45日前まで	湿水散布	2回以内	稲こうじ病に対する防除適期は出穂期の21～14日前です

☆いもち病の防除剤はこのほかに多数ありますのでJAにご相談ください。 ☆農薬はラベルをよく読んで使用しましょう。